

ワークショップの趣旨について

植田 剛史

第1セッションの司会を務めさせていただきます、人文社会学研究所の植田剛史と申します。よろしくお願いいたします。

さて、本日のワークショップでは、「ネオリベラリズムを再審する」をテーマに設定しました。お手元にありますフライヤーの裏側に、ワークショップ全体の趣旨をまとめた文章（本報告書3頁の「企画趣旨」）を載せていますので適宜ご参照いただければと思いますが、2000年代を振り返ってみますと、タイトルにもあるネオリベラリズムという言葉は、いわば日本社会を考えるうえでの時代のキーワードのひとつであったように思います。おそらくその背景には、1990年代以降、とりわけバブル経済崩壊後の不況下で、「このままではまずい」「何か改革をしなければならない」といった認識があらゆる領域で浸透し、しかも、そうした改革が構想として語られただけではなく、様々なかたちで社会に実装されていったということがあります。そして2000年代には、たとえば「格差社会」といった言葉が広がりましたが、こうした改革によるある種の歪みや矛盾が、目に見えるかたちで表れてきました。こうしたなかでネオリベラリズムというキーワードは、一連の事態を名指すものとして、社会学だけではなく——もちろん社会学にもいろいろありますが——政治学や経済学なども含めて、個別の学問領域を超えて広く共有されていったように思います。2008年のリーマンショックの頃は、こうした状況が最も顕著であったように思いますし、東日本大震災後の復興政策の問題もまた、その延長線上で、たとえば「惨事便乗型資本主義」といったキーワードとともに論じられてきました。

しかし、その後の動向を見ていますと——今年がリーマンショックからちょうど10年目にあたるわけですが——、「企画趣旨」にも挙げていますように、ネオリベラリズムという範疇には必ずしもうまく収まらないような多様な方向性が出てきていて、現在も2000年代の当時と同じようにネオリベラリズムは時代のキーワードなのかとといいますと、なかなか難しくなってきたのではないかとも思います。

ただし、あらためて振り返ってみますと、1990年代はもとよりネオリベラリズムが席卷していた2000年代についても、様々な領域で同時並行的に進んできた動きは、必ずしも一方向への動きではなかったかもしれないわけです。にもかかわらず、ネオリベラリズムをキーワードにしながら、それらがひとつの視角に収められてきたのだとしたら、それによって見えるようになったものは何で、逆に見えなくなってしまったものは何だったのか。あるいは、こうした反省もふまえたうえで、それでもなおネオリベラリズムという視角から現在の社会を分析するとしたら、どのようにそれはあり得るのか。現在あらためて向き合うべき課題はこうしたことではないかということで、今回、このようなテーマのワークショップを設定した次第です。

本日の登壇者には、2000年代からネオリベラリズム研究の最先端を走ってきた方々をお招きしました。都市政治や都市空間、あるいは福祉・ボランティア・市民社会から刑務所での処遇といった具体的な場面に至るまで、対象やフィールドは多岐にわたりますが、以上のような文脈も踏まえつつ議論を深められたらと思っています。

それでは既に時間も過ぎていきますので、さっそく第1報告の丸山さんからご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。